

# 応援団に入ろう!

よびかけ人

## しのだづま考

代表

永六輔

鎌田慧

辛淑玉

金城実

中山千夏

大西昭宏

ふじたあさや

角衛秀

語ってください  
歌ってください  
叩いてください  
踊ってください

町から村へ 村から町へ  
人から人へ 人から人へ

中西和久さん あなたは  
一人ではありません

みなさまへ

私たちの友人・中西和久さんは、「被差別」をテーマに長年にわたりひとり芝居を演じ続けています。

「しのだづま考」(作・演出・ふじたあさや)は彼の代表作です。

このお芝居は日本の伝統芸能を駆使した作品で、芸術祭賞や海外の演劇祭賞などもいただいています。とても楽しく、また「人権」についてとくと考えてみたくなるお芝居です。

全国演劇鑑賞会連絡会  
(演鑑連)お芝居をみんなで見ようという会。労演・市民劇場ともいう。のあ

事務局長から、この「しのだづま考」



2014年初春「しのだづま考」アフタートーク(紀伊國屋ホール)

「四つ(よっつ)の女のはなしやろう?」という発言がありました。「四つ(よっつ)」とは人間以下の畜生という意味で、昔から被差別部落の人々に投げかけられてきた差別言辞です。中西さんがその差別発言に抗議の声をあげるとその組織の幹部たちは反省するどころか、その声を演鑑連に対する「侮辱」発言として中西さんの告発を無視しつづけています。

あなたはご存知ですか?  
話を聞いた私たちは、憤りと怒りでいっぱいになりました。

「もう黙ってはいられない!」と立ち上がった中西さんを、一人にはしない!させない!と、私達は応援団を結成しました。

これを読んでくださったあなた。私たちと一緒の声をあげていただけませんか?

一人より二人、二人よりさらに、人から人につないで行ってください。

「基本的人権がまもられる社会でありたい!」と願う私たちです。中西和久さんの演劇活動を支援していきましょう。ご賛同ください。

\*詳しい資料、応援団入会手続き等は、下記へ。応援団ではボランティアスタッフ募集中です。お問い合わせください。

「しのだづま考」応援団 facebook ホームページ <http://www.shinoda-oendan.com>

事務局：〒104-0045 東京都中央区築地 7-16-3-403 京楽座気付 FAX 03-3545-0933 info@shinoda-oendan.com

支局：奈良 090-3474-0931 (清原)、滋賀 090-5322-1234 (山口)、大阪 090-4281-4803 (美濃)、神戸 090-3264-8270 (高橋)

福山 090-4653-7344 (割石)、広島 090-4143-3466 (森島)、福岡 090-8764-4015 (溝上)、香川 090-3956-5129 (藤本)

(作品のこと、事件の詳細、発言の証拠録音などがあります。応援団事務局へアクセスしてください。)

\*ひと言メッセージ\*

入会書・メッセージ送付 FAX 番号 03-3545-0933 記入日 年 月 日

『しのだづま考』応援団 入会申込書 (カンパのみの応援も歓迎です)

お名前	フリガナ _____ 明・大・昭・平・西暦 年 (任意) 匿名希望の方は〇印 ( )
ご住所	〒 _____
E-mail	Tel. _____
*活動資金カンパにご協力ください。 この活動はみなさんのカンパで運営されています。	
1口 1,000円 × 口 合計 円	口座名「しのだづま考」応援団 郵便振替口座番号 00180-0-386648

全国演鑑連代表の高橋武比古氏は中西氏に「**真摯に応える必要**」があり「たとえ見解が違って、また激しい議論になったとしても、**向かい合って直接自分の言葉で語り合うことが必要**」公益社団法人日本劇団協議会西川信廣氏。



## 2012年7月20日全国演鑑連代表の高橋武比古氏は中西氏に「真摯に応える必要」があり「たとえ見解が違って、また激しい議論になったとしても、向かい合って直接自分の言葉で語り合うことが必要」公益社団法人日本劇団協議会西川信廣氏。

演鑑連の活動の中で起こった「四つの女のなはなしやろう？」発言と全国演鑑連の理念（日本演劇の民主的発展）にどのような整合性があるのかと、この時中西和久氏は質問した。それに対して有馬氏は次のように答えた。（YouTube「全国演鑑連賞賛会幹部による部落差別発言事件」に音声あり）

有馬「いま、中西さんが言われた発言のようなことを言ったのは僕です。（中略）勿論「しのだづま考」がどんなお芝居かという話の中で「四つの女の話だ」というような正確に、そのことを言ったかどうか、ちょっと僕にも記憶はないんですが、部落問題を取り上げている芝居である、というその言葉の中に「四つ」という表現をしています。確かにそういう記憶はありません。その「四つ」という表現が聞いていた人達にどのように反応したかなあつて言うことを長〜いことちよつと引つかかっていたということがあります。それが最近中西さんとお会いした時に「四つ」の話をしましたよね。ちよつと僕ずつと気にかかっているんですよというお話をしたことはあります。（後略）

総合演劇雑誌「テアトロ」2014年6月号掲載より抜粋

# 「しのだづま考」上演をめぐる

賤称語

中西「あなたの「四つの女発言」は、私の母に言っているんですか？」

A氏「え、僕も同じですわ。和歌山の大きな同地域出身でね、母は水平社運動からやってくる。」

中西「ほう、あなたは自分のお母さんに「四つの女」というんで

すか？」

2012年4月2日、関西のある演劇鑑賞会事務局での会話である。「四つ」とは「四足」「畜生」「人間以下の獣」という意味を込めて昔から被差別部落に投げかけられてきた賤称語である。

信太妻

ひとり芝居「しのだづま考」（作・演出／ふじたあさや）は1989年リバイバルのおおさか（現大阪人権博物館）の企画で生まれた作品で、中世の放浪芸説経節「しのだづま」を現代的社会的視点から再構成した、陰陽師安倍晴明の出生譚である。

「葛の葉子別れ」として歌舞伎、文楽、警女唄など各地の伝承芸能ともなり一千年にわたって生き続けている物語だ。現代の部落差別を問う舞台ともなっている。

全国演劇鑑賞団体連絡会（以下、全国演鑑連）は、北海道から鹿児島まで全国約150の町々に事務局を置く16万人を擁する会員制の組織で、創立以来50年を超える。

十数年前、「しのだづま考」の営業で私がその事務局を訪ねた折「ああ、四つの女の話やろう？」と発言したのはA氏であり、傍らにはその発言を非難するでもなく、ただ黙って聞いている十数人の演鑑役員の人々が控えていた。私は「いや、そういう人に見ていただきたくてこの芝居は作ったんです」と応えるのが精一杯だった。「しのだづま考」とは部落出身者なんでしょうか？と念を押した。あなたなら出身者がカムフラージュするためにワザと大仰に差別発言をすることもままあるからである。が、やがて彼が「出身」を騙っていた事実が判明した。

「民主主義」と「差別」

2012年7月20日私は全国演鑑連（主催：公益社団法人日本劇団協議会（以下、劇団協）&日本新劇製作者協会）のシンポジウムの席上で、この差別発言を提起した。なぜなら、彼の発言は演鑑連の活動の中で、しかも多くの役員も参加する中で発せられた言葉である。私は「演鑑連の理念『日本演劇の民主的発展』と『四つの女の話やろう？』発言がどのような整合性を持つのかお答えいただきたい」と質問した。各地の演鑑連事務局長や役員、劇団関係者など300人程が参加していた。しかし、回答はなかった。が、この席上で発言の当事者A氏は立ちあがり「確かに言った」と応えている。反省の言葉も自己批判もなかった。

「日本演劇の民主的発展」を理念とする演鑑連の運動に私は「夢」を託して演じてきた。だから2013年5月3日、千駄ヶ谷の日本青年館で開催された全国演劇鑑賞会研究集会でも私は、同じ質問をした。が、そこに出席していたA氏は前言を翻し「私はそのような表現はしていません。」と聞き直り、満座の中で中西が部落出身者であるこ

とを披歴するにいたった。また全国演鑑連代表高橋武比古氏の集会のためは「中西さんの発言はこの会議に対する侮辱だと思えます。」であった。傍観者は加害者

ともあれ私には「うそつき」の烙印が押されてしまった。差別を告発することは命がけである。「泣き寝入り」をすればこれほどの攻撃はなかったかもしれないが、告発をした途端に方々から非難の矢が飛んでくる。これは「イジメの構造」と同じだ。差別を傍観している事は、差別に加担している事である。傍観者は加害者であることを忘れてはいけない。

公開討論会

その後、私はこの事件について劇団協会会長であり文学座演出家の西川信廣氏と公開質問状でやり取りをした。やがて氏は劇団協を代表して、件の発言が「差別」であり、全国演鑑連代表の高橋氏に対しては、中西に「真摯に応える必要がある」「わたしは演劇をやるものは、たとえ見解が違って、また激しい議論になったとしても、向かい合って直接自分の言葉で語り合うことが必要」との認識を示した。この4月13日、西川氏の呼びかけで「劇団協」「演鑑連」「応援団」三者による公開討論会のための打ち合わせもたれたが、高橋氏は「演鑑連はあらゆる差別に反対している団体」であり「差別」発言はなかった」と主張してこの提案を拒否した。演劇界にも部落出身者はいらる。このような差別がまかり通れば「出身者」は泣き寝入りをするしなくなる。

中西和久プロフィール

劇団「芸能座」（主宰小沢昭二）で俳優修業。「しのだづま考」の演技で'91年度文化庁芸術祭賞受賞、新国立劇場開場記念賛助公演を務める。08年ロシア・エカテリンブルク国際演劇祭特別賞、福岡県文化賞、松本市市民劇場賞最優秀俳優賞等受賞。テレビ／NHK BS プレミアム「心はもに狂わねど」中西和久説経節ひとり芝居「作兵衛さんの炭釜」ラジオ／KBC「中西和久ひとり日記」。京楽座主宰。

